

# 無量義經五箇の大事

## 第一 無量義經德行品第一の事

御義口伝に云はく、無量義の三字を本迹観心に配する事、初めの無の字は迹門なり。其の故は迹門は理円を面とし不変真如の旨を談ず。無常の撰属なり、常住を談ぜず、但、是法住法位世間相常住を明かせり。是理の常住にして事の常住に非ず。理の常住の相を談ずるなり。空は無の義なり。但し此の無は断無の無に非ず。相即の上の空なる処を無と云ひ空と云ふなり。円の上にて是を沙汰するなり。本門事の常住無作の三身に対して迹門を無常と云ふなり。守護章に云はく「有為の報仏は夢中の権果、無作の三身は覚前の実仏」云云。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者を無作の三身覚前の実仏と云ふなり云云。

## 第二 量の字の事

御義口伝に云はく、量の字を本門に配する事は、量とは懸撰の義なり。本門の心は無作の三身を談ず。此の無作の三身とは仏の上計りにしては之を云はず。森羅万象を自受用身の自体顕照と談ずる故に、迹門にして不変真如の理円を明かす処を、迹の当体を改めずして無作の三身と沙汰するが本門事円三千の心なり。是桜梅桃李の己が位己が体を改めずして無作の三身と開覚す。是即ち量の義なり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は無作三身の本主なり云云。

## 第三 義の字の事

御義口伝に云はく、義とは観心なり。其の故は文は教相、義は観心なり。所説の文字として心地に沙汰するを義と云ふなり。就中無量義は一法より無量の義を出生すと談ず。能生は義、所生は無量なり。是は無量義經の能生所生なり。法華經と無量義經とを相對するの能所に非ざるなり。無相不相名為実相の理より万法を開出すと云ふ。源は実相なる故に観心と云ふなり。此くの如く無量義の三字を迹門・本門・観心に配当する事は、法華の妙法等の題と今の無量義の題と一体不二の序正なりとの相承の意を相伝せんが為なり云云。

## 第四 処の一字の事

御義口伝に云はく、処の一字は法華經なり。三蔵教と通教とは無の字に撰し、別教は量の字に撰し、円教をば義の字に撰するなり。此の爾前の四教を撰するなり。四教を所

生と定め、さて序分の此の經を能生と定めたり。能生をしばら且く処と云ひ、所生を無量義と定めたり。仍って権実相對して無量義処を沙汰するなり。

## 第五 むりょうぎしよ無量義処の事

御義口伝に云はく、法華經八卷は処なり、無量義經は無量義なり。無量義は三諦・三觀・三身・三乘・三業なり。法華經に於一仏乘分別説三と説いて、法華の為の序分となるなり。ここ爰を以てきやくべつ隔別の三諦は無得道、円融の三諦は得道と定むる故に、十界各無量にことわり い義処たり。此の当体其のまま俚実相の一理より外は之これ無くして諸法実相と説かれたり。其の為の序なる故に一念三千の序として無量義処とは云ふなり。処は一念、無量義は三千なり。我等衆生朝夕吐く所の言語も依正の二法共に無量にことわり義たり。此妙法実相なり。然る間法華の為の序分開經なり云云。